

自然の中での活動体験が学生硬式テニス部員のモラルに及ぼす影響

竹下 光 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：自然体験活動 硬式テニス モラル

1. 序論

学生の硬式テニスは個人競技であるが集団での練習が多く、チームとしての活動が重要視されている。日本テニス協会¹⁾はナショナルチームの目標を各世代のチーム戦で「TEAM JAPAN」として戦うこととしており、モラルは集団活動を効果的に進めるために重要な要素とされている。一方、野外教育で用いられるASE活動は一つのグループが一人では解決できない精神的、身体的課題に対し協力しながら解決していく活動で、近年ではスポーツチームのチームワーク向上を目的に行われている。

そこで本研究では、ASE活動を用いた、自然の中での活動体験が、学生硬式テニス部員のモラルに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】B大学男子硬式テニス部に所属する1～4年生、計8名を実験群とし、同じ学生リーグのS大学男子硬式テニス部に所属する1～4年生、計12名を統制群とした。

表1 プログラム内容

日時	活動① (7月24日)	活動② (8月9日)
内容	<ul style="list-style-type: none"> フープリレー 人間知恵の輪 (アイスプレイング) クモの巣 エレクトリックフェンス 日本列島 バックフライング ラインナップ 	<ul style="list-style-type: none"> モンスター 目隠し図形 熊の爪 ビーム
活動時間	2時間半	2時間

【プログラム】2011年7月24日に活動①として、8月9日に活動②として自然の中での活動体験を行った。活動の主なプログラムは表1の通りである。

【調査用紙と調査時期】

1) 運動部モラル調査：竹村³⁾らが作成した、4基準、16項目を挙げ、計20問の質問項目からなる運動部モラル調査を用いた。活動①の直前(活動①pre)、直後(活動①post)、活動②の直前(活動②pre)、直後(活動②post)、活動②から一ヶ月後(post2)の計5回実施した。また、統制群は活動①、活動②から一ヶ月後にあたる時期に調査を行った。

2) ふりかえりシート：筆者が独自に作成し、ASE活動終了後に実施した。

3) スタッフ記録シート：筆者が独自に作成したものを、スタッフがテニス部員の活動を記録するものとして用いた。

3. 結果と考察

1) 各活動時期におけるモラル得点の変化

活動①pre-post2間において実験群のモラル得点は有意に向上した($Z=-2.52, p<.05$)。また、活動別では、活動①pre-活動①post間においてモラル得点は有意に向上した($Z=-2.52, p<.05$)。活動②pre-活動②post間においても有意な傾向で向上した($Z=-1.68, p<.10$) (図1)。実験群のモラルが向上した要因として、「役割意識」、「目標意

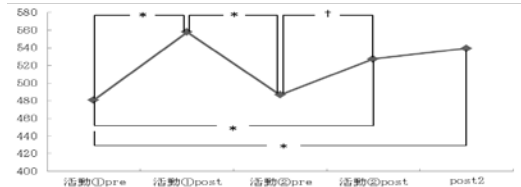


図1 各調査時期におけるモラル得点の推移

識」、「意識の共有」の向上が挙げられる。活動①において「部員と部の関係」の「役割意識」に関する質問に向上がみられた。クモの巣、エレクトリックフェンスでは支える者、指示を与える者にわかれて違った役割をこなしたが、それぞれのゲームをあと一人のところで失敗した。次の日本列島では課題を達成しようとする強い気持ちが感じられ「2つのゲームで失敗したので次は絶対成功させようと思った」という意見があり、部員一人一人の目標に対する意識の改善や、課題達成のための強い気持ちが役割意識を持たせたと考える。活動②では「部内の人間関係」の「部内の親和」において向上がみられた。活動②では目隠し図形というゲームがあり、「目が見えない分、いつもより多く話した」という目隠した分、いつもより多くコミュニケーションをとる必要性を要因として挙げた。活動を通して部員同士の共通の意識が改善されたと考えられる。

2) 部員ごとにみたモラルへの影響

部員ごとにモラルに及ぼした影響は異なるが、上級生と下級生との関わり、役割意識、部員間でのコミュニケーションが変化の要因に挙げられる。4年生の対象者Aは活動に積極的に参加し、後輩の意見を聞き、班をまとめた。そのような行動は、下級生に活動しやすい雰囲気になったと考えられる。対象者Aは活動の中で後輩の意見を聞き、コミュニケーションを深めたことで雰囲気改善され、下級生も積極的に発言したことで、モラルに影響を及ぼしたことを挙げた。

4. まとめ

自然の中での活動体験は学生硬式テニス部員のモラルに影響を及ぼした。その要因として、「役割意識」、「目標意識」、「意識の共有」が挙げられ、部員ごとにモラルに及ぼした影響は異なった。今後は被験者を増やし、学年間、部の役割、性別などでの検討を行いモラルの変化をみながらより具体的な要因を明らかにする必要がある。また本研究では自然の中での活動体験においてはASE活動を行ったが、今後より冒険的な活動を行うことでモラルに肯定的な影響を及ぼすのではないかと考えられる。

参考文献

- 1) 日本テニス協会 (2011) 日本テニス協会公式サイト、ナショナルチーム (<http://www.jta-tennis.or.jp/index.html>)
- 2) 布目靖則 (1989) キャンプテキスト 日本野外教育学会編 杏林書院 pp.127-133.
- 3) 竹村昭、丹羽功昭 (1968) 運動部のモラルの研究 (1) 体育学研究 12 (1)、pp.77-83.